

【研究ノート】

日本語の連濁と形態構造 — OCP原則の観点から —

国際学部 西原 哲雄

Tetsuo NISHIHARA, Faculty of International Studies

要旨

本発表では、日本語の複合語に見られる、特徴的な音声変化である連濁（Rendaku）という現象とその形態構造について焦点を当てる。「色紙」のような複合語では第二要素の名詞では「がみ」のような濁音化が生じるのに対して、「神風」のような複合語では「*がぜ」とはならず濁音化、すなわち連濁は生じていない。

そこで、本発表では、このような連濁現象が、言語学理論の中で普遍的な制約としてテウ案されている必異原則（Obligatory Contour Principle : OCP）によって適切に説明できることを示しながら、日本語の語彙の構造が混成的構造であることも指摘したい。

0. はじめに

本稿では、2つの単語の連続し複合（複合語化）する時、前部構成要素の単語の末尾の音声の影響によって、後部要素となる単語の語頭音が濁音化する現象のであるを連濁（Rendaku）と言う現象について、OCP原則や語彙の階層性などの複合的要因によって、その現象の説明が可能であることを指摘する。

1. 連濁の諸例の分析

以下において、連濁の生起現象について概観することにする。後続する名詞の語頭子音が有声化していることが確認される。

(1)

a. iro + kam → iro + [g]ami

b. yu + toofu → yu + [d]oofu

そこで、この連濁を形態構造に基づいて規則化すると次のようになる。（ここでの [+voice] は濁音を示す）。

(2) 連濁 (Rendaku : Sequential Voicing Rule (Rendaku formulation here adapted from Otsu (1980)))

$C \rightarrow [+voice] / _ + [_ X]$

Condition : X does not contain [+voice, -son]

しかしながら、複合語の後部要素にすでに濁音が存在する時には、この連濁化は、以下のよう
に阻止されることになる。

(3)

a. [kami] + [kaze] → [kami + *[g]aze]

b. [doku] + [tokage] → [doku + *[d]okage]

この現象は次のように定義されるLyman's Law (ライマンの法則) によって説明される。

(4) Lyman's Law (ライマンの法則) : Blocking of sequential voicing in stems containing
voiced obstruents (Lyman's Law, OCP on [+voice, -son])

また、複合語でも、以下の (5-7) で、見られるような並列複合語では、連濁は生起しない。

(5)

a. ヤマガワ (山川 = 山にある川) → []Wd

b. ヤマカワ (山川 = 山と川) → []Wd []Wd

(6)

a. アテナガキ (宛名書き) → []Wd

b. ヨミカキ (読み書き = 読みと書き) → []Wd []Wd

(7)

a. オビレ (尾鰭 = 尾の鰭) → []Wd

b. オビレ (尾鰭 = 尾と鰭) → []Wd []Wd

(窪園 (1995))

さらに、この連濁は日本語の中の、和語 (Native Japanese : NJ) のみに適用され、漢語
(Sino-Japanese : SJ) や外来語 (Foreign Word : FW) では適用されないと一般的には主張
されている。そこで、この適用状況をうまく説明するために日本語の単語が次のように階層
化されており、一番深い層に位置する和語のみに適用されている。そのような現象は以下の
図にまとめることができる。

(8) 日本語の単語階層

[外来語 (FW)]

|

[漢語 (SJ)]

|

[和語 (NJ)]

(西原 (2013))

このような階層で、基本的には和語のみが、連濁を起こし、漢語や外来語は連濁を起こさないことが確認される。以下の類例も参照のこと。

(9)

[biwa] + [ko] → [biwa + *[g]o] (琵琶湖：漢語)

[rein] + [kooto] → [rein + *[g]ooto] (レイン・コート：外来語)

このように、和語や外来語では基本的には連濁が生じない事から、(9)の定式は次のように修正される事になる。

(10) 連濁 (Rendaku : Sequential Voicing Rule (Rendaku formulation here adapted from Otsu (1980)))

C → [+voice] / [] + [__X]

Condition : X does not contain [+voice, -son] / [__X] is NJ

上記のように定式化すれば、連濁が和語のみに適用され、漢語、外来語では、適用されないことが明確に示すことが可能となる。

(11)

a. [yu] + [tofu] → [yu + [d]oofu] NJ (湯豆腐：和語)

b. [biwa] + [ko] → [biwa + *[g]o] SJ (琵琶湖：漢語)

c. [rein] + [kooto] → [rein + *[g]ooto] FW (レイン・コート：外来語)

しかし、実際には、連濁の適用は、上記で示された日本語の語彙階層において絶対的に適用されるものではなく、以下のような適用率における相違というものが存在する。

(12) NJ (87%) > SJ (10~20%) > FW (0または例外的に適用)

(Irwin (2011))

漢語の一部 (間 (けん)→人間 (にんげん)、徳 (とく)→功德 (くどく)) や外来語においては、連濁が適用されている場合があるからです。特に江戸時代などに借用された外来語は、以下に挙げるような外来語においても連濁が生じる場合があり、これは本来は外来語であった語が長い歴史を経ることによって現代においてはもうすでに日本人にとっては外来語とは感じる事が無くなり、(8)における外来語の層から和語の層へと移動したと考えることに

よってうまく説明することが可能となる（西原（2013））。

- (13) a. ama + [kappa]FW →
 ama + [[g]appa]NJ （外来語（ポルトガル語）：FW→NJ）
 b. kuwae + [kiseru]FW →
 kuwae + [[g]iseru]NJ （外来語（カンボジア語）：FW→NJ）

このような、外来語の層から、和語の層への移行というものも、日本語における形態構造の範疇の再構築と考えることができる。それをまとめると以下のような階層構造の変化が認められることになる。

- (14) 日本の語彙層の再構築

[外来語（FW）]

↓

[和 語（NJ）]

これらの形態構造の範疇が、(15)のような例では史的な変遷を経ることによって、再範疇化が起きることによって、連濁が本来外来語であるような場合にも適用されると考えられる。しかしながら、昭和時代以降に借用された外来語では、連濁が決して起きていないことにも注意しなければならない。

- (15)
 a. [ama] + [kappa]FW → [ama + [g]appa]NJ
 b. [kuwae] + [kiseru]FW → [kuwae + [g]iseru]NJ
 c. [garasu]FW + [keesu]FW → [garasu + *[g]eesu]FW（昭和借用）

さらに、この連濁現象は、日本人の苗字の発音とも関わっており、苗字の前部要素の濁音がある場合は、後部要素で濁音化が阻止されことになり、そうでない場合は、後部要素の発音にはゆれ（清音か濁音のいずれか）が見られる。

- (16)
 a. [siba] + [ta] / *[da] （柴田）
 b. [naga] + [sima] / *[zima] （長嶋）
 c. [sima] + [ta] / [da] （島田）
 d. [naka] + [sima] / [zima] （中島）

2. OCP原則による分析

また、このような連濁の現象を説明するのに、必異原理 (Obligatry Contour Principle : OCP) と呼ばれる以下の原理を援用する。

(17) Obligatry Contour Principle : OCP)

*[a a]

In a given autosegmental tier adjacent identical segments are prohibited.

(McCarthy (1979))

OCPに基づく弁別素性の一致や不一致によって、連濁の有無を的確に説明することは可能となる。さらに、英米語の母音連続を阻止 (hiatus) するための[r]音挿入も母音という素性の連続を阻止する現象としてOCPによって説明が可能である。

(18)

- a. [yuu] + [toofu] → [doofu] (+voice -voice)
- b. [kami] + [kaze] → [*ga ze] (+voice +voice)
- c. idea of of → idea r-of [VV] → [VCV]
- d. law and order → law and r-oder [VV] → [VCV]

結語

以上、本稿では、以下に挙げるように連濁の現象についてOCP原則を援用することや、連濁の階層性、などを提案することによって、連濁現象や英語音変化の詳細を的確に説明できることを明確に確認をした。

- a. Rendaku is made of a hierarchy of word classes (NJ, SJ and FW).
- b. Rendaku is basically governed by OCP.
- c. Rendaku has some exceptional cases.
- cf. [nawa] + [hasigo] → [nawa] + [basigo] (+voice +voice : *OCP)

注

本稿は、追手門学院大学国際文化学会研究会 2024年度第1回研究発表 (2024年7月24日 於追手門学院大学安威キャンパス) における口頭発表に加筆・修正を行ったものである。

謝辞

口頭発表の際、追手門学院大学国際学部の増崎恒先生、Ross Miller先生、松宮新吾先生、足立勝先生、藤川武海先生、Thomas Brook先生方から貴重なご指摘・示唆をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。なお、本稿の不備はすべて筆者の責任である。

参考文献

- Irwin, M. (2011) *Loanwords in Japanese*. Amsterdam : John Benjamins.
- 窪園晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』 東京 : くろしお出版.
- McCarthy, J. (1979) "Formal Problems in Semitic Phonology and Morphology." Ph. D. dissertation, MIT.
- 西原哲雄 (2013) 『文法とは何か』, 開拓社, 東京.
- Otsu, Y. (1980) "Some Aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems," *MIT Working Papers in Linguistics* 2, 207-228.